

時評

うちだ まさとし
内田雅敏
(弁護士)



ロスタイムにはドラマがある。一二月二日、ラグビー早明戦、32対26と、早稲田の6点リードで、後半戦も終了間際、早稲田ゴール前で、激しい攻防戦。残るは、わずかなロスタイムのみ。明治がトライ。ゴールキック成功、33(トライ5点、ゴールキック2点)対32で、逆転勝利。ラグビーは前後半、各四〇分間、互いに攻防を尽くす。途中、選手の負傷、交代など、試合の中断がある。中断時間の合計をロスタイムとし、本来の四〇分間終了後も試合を続行する。通常、ロスタイムの時間は、三分前後だが、時間を経過しても、プレイが途切れず、続いている場合にはなお、試合が続行される。勝っている側は、取得したボールをライン外にけり出し、試合を切るうとする。負けている側はプレイを中断すれば、そこで終わりなので、キックという効果的な戦法が使えず、ひたすらパスとランで攻撃を続け、逆転を狙う以外にない。この攻防がラグビーの醍醐味でもある。今回のようにワントライ、ワンゴール(合計7点)で逆転できる6点差でロスタイムを迎えたとき、競技場の興奮は頂点に達する。早稲田も明治の猛攻をよく凌いだ

「ロスタイム」ではプレイを中断できない

が、終了間際、ついに力尽き、明治にトライを許し、逆転負けを喫した。《ロスタイムではプレイを中断できない》というテーゼ、どこか人生に似ている。

今年は七二年の日中国交正常化から四〇年、本来ならば、政治、経済、文化のあらゆる分野で祝われ、新たな日中関係の構築に向けての年となるはずであった。それを三月の河村名古屋市長の「南京大虐殺はなかった」発言が、そして四月の石原都知事の都による尖閣列島(中国名釣魚島)購入構想が、ぶち壊した。「ハーメルンの笛吹き男」石原は、日中武力衝突を夢想する「愉快犯」だ。橋下大阪市長の「従軍慰安婦」否定発言も含めて、東京、大阪、名古屋という日本を代表する自治体の首長たちの歴史認識の欠如した、発言が、隣国との友好を妨げ、アジアの緊張をもたらしている(ナシヨナリズムを煽り、求心力を高めようとする中、韓の首脳にも問題はあつた。しかし、仕掛けたのは石原らだ)。それが又、「日米同盟」の強化(従属の強化)、沖縄の米軍基地の固定化のための口実とされる。解散、総選挙の中で、自民党は、極右に回帰し、「国防軍」、「改憲」、「領土死守」等々の言葉が声高に語られている。「維新」という、ポピュリスト集団も登場した。経済格差の拡大など閉塞感が強まり、何かスカッとしたいという漠然とした鬱悶感が若い世代を中心に広がりつつある。七一年前の一九四一年一月八日の「日米開戦」の日、知識人を含め多くの日本人が「スカッとした」気持ちに酔いしれた。それ

が、更なる大きな転落であることに気づいていた人は僅かであった。歴史は薄められて再来する。私たちは、今また同じ過ちを繰り返すのか。戦後六七年、私たちは一体何をして来たのか。憲法前文に「政府の行為によつて、再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、……この憲法を確定する」とあるように、憲法は悲惨さの中から生まれた。平和憲法の背後にはアジアで二〇〇万人、日本で三一〇万人の死者達がいる。それは安倍晋三自民党総裁らが声高に語る「尊い犠牲」では断じてない。理不尽な非業の死だ。非業の死を強いられた死者達の無念さに対しては、ひたすらにその死を悼むことであり、決して死者を称えてはならない。憲法の理念をよく体得し、その内容を実践しながら深めてゆくことこそが、死者への鎮魂となる。

敗戦の年に生まれ、戦後民主主義下で育った私たちの世代も、ぼつぼつ「ロスタイム」。脱原発、脱石原都政、偏狭なナシヨナリズムでなく、平和をアジアに発信する「宇都宮けんじ」を擁して闘った東京都知事選挙、残念ながら敗れた。しかし、多くの多様な市民が参加し、闘いの継続を誓った。ロスタイムではプレイを中断することはできない。その昔《連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして斃れることを辞さないが、力尽くさずして挫けることを拒否する》と啖呵を切ったことも忘れてはいけない。こんなギスギスした社会を孫たちに引き継がせるわけにはゆかないのだ。